

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17699

研究課題名（和文）発達障害支援専門職における多職種連携実践力をささえる学びの過程の解明

研究課題名（英文）The way to learn and the pathway to development of practical competencies of Interprofessional work (;IPW) in professionals supporting persons with disabilities

研究代表者

森脇 愛子 (MORIWAKI, Aiko)

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：50573557

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：発達障害児者の発達支援に携わる医療・教育・心理・福祉専門職における多職種連携協働IPWや多職種連携教育IPEのあり方を模索するなかで、専門職個人の連携実践力の「学び方」や「学びの過程」を俯瞰的に捉えるとともに、学びを促進する要因を探索することを目的とする。2つの方向性の研究アプローチを用いた。

研究1：後方視的アプローチでは、1) 発達支援専門職に共通の多職種連携コンピテンシーを抽出した。2) 学びの促進要因を検討した。

研究2：前方視的アプローチでは、3) 卒前養成段階カリキュラムの職種毎の違いを分析した。4) 教育領域の卒前IPEを効果検証した。5) 現職者のIPE実践からコンテンツの有用性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

すべての専門職が多職種連携の実践力を備えていくことで、支援対象となる発達障害児者やその家族への直接的な還元（＝支援の最適化、有効化）が増すことに加えて、専門性を獲得・発揮しながら成長できることや、業務効率化、過重負担減といった専門職自身への還元も大きいと考えられる。本研究において発達支援専門職に求められる多職種連携の実践力を、養成段階から現職者として活躍する熟達の過程を俯瞰的に捉え、そのために継続的に学び続けられる場所と機会を創出することの意義や、さらにその学びをささえる関連要因や効率化の方略についても示唆を与える成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：This research aims at a good practice of Interprofessional Work (;IPW) for professionals (clinical areas such as medical care, education, psychology, and welfare) who support persons/children with developmental disabilities.

What this research has revealed is that 1) pathway of development IPW-practice competency among individual professionals who support people with disabilities, and 2) factors to promote effective Interprofessional Education (;IPE) (about opportunity/environment/strategy) for interprofessional working groups and for students in each training course.

For these results, 5 small analyses were required. By retrospectively-prospectively investigating the pathway of development in professionals and students, the way to learn competencies for IPW and the way to set up an opportunity as IPE have become clear. However, as results of IPE practical research, it's too early to conclude the entire positive effect for improving competency. We want to continue our research.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：多職種連携協働 多職種連携教育 発達支援 発達障害 学びの過程 コンピテンシー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今日、発達障害のある子どもから成人(以下、発達障害児者)への発達支援は、教育・医療・リハビリ・福祉・心理などの様々な領域において、高度化・多様化した専門的アプローチが実践され、当事者とその家族を取り巻く環境も大きく変化している。そしてそれに対応するように、専門職と呼ばれる支援従事者の在り方や求められる知識・能力にも変化の徴候が見受けられる。近年、医療領域を先駆けとして多職種連携協働 IPW: Interprofessional Work のための行動指針(WHO, 2010)が打ち出され、現場実践やその教育活動が始動している。各専門職間のコミュニケーションによって『互いに、互いについて、互いから(with, about and from each other)』学び、そして支援の対象者により良い治療や支援効果をもたらすために実践されるものである。これらの能力は発達障害児者の発達支援に従事するなどの専門職においても必須であり、その能力向上の仕組み作りは喫緊の課題であると言えるが、個人の経験や自己研鑽に依存してきた従来の学習方法に依存することなく、多様な職種間の対立する価値を乗り越える意図的な学習機会として IPE: Interprofessional Education が必要と示唆されている(JAIPE, 2016)。「うまく出来れば成果が大きいことが分かっているが、同時に誰もがやること自体を躊躇する」といった多職種連携に対する心理的バリアもある。この背景には、連携実践力という専門能力の身に付け方や、何から学び、どう変化できるのかという見通しや知識がないこと、つまり<学び方の学び>や<熟達への過程>が示されていないからではないかと考えた。つまり、個々の専門職が自身の連携実践力がどのような学びの過程に支えられるのか、多職種とどのような相互作用の中で生み出されるものなのかを、俯瞰的に可視化することが重要である。

発達支援の専門職において、多職種と連携することは目的ではなく、あくまでも対象となる発達障害児者とその家族の健やかな成長や QOL 向上のための手段である。多様な専門的見地からの支援は何よりも相乗効果をもたらすものであるが、そのために関係者の連携や協働の円滑さが鍵を握ることは言うまでもない。専門職が連携実践力を備えるための学びは、何よりも対象とする発達障害児者への直接的な還元(=支援の適正化、有効化)に加え、さらに自職の専門性を最大限に発揮できることによる仕事満足度の向上(古株, 2012)や、業務の効率化による過重負担減などの専門職自身への還元も大きいと考えられる。

2. 研究の目的

発達障害児者の発達支援に携わっている様々な領域の専門職に共通して求められる連携実践能力を、養成段階から現職者として活躍するなかで、どのようにすれば身に付けることができるのか、どのような相互作用の中で生み出されるものなのか、つまり実践能力の“学び方”や“学びの過程”を明らかにしたい。本研究は、発達支援に携わる多領域専門職における連携実践力の学びの過程を俯瞰的に可視化し、検討することを目的とする。そして卒前・卒後(現職者向け)の連携実践力向上のための、効果的な機会・環境・方略などの促進要因を探索する。

3. 研究の方法

本研究は、発達障害児者の発達支援にかかわる多領域の専門職が連携実践力を学ぶ過程について、時間軸に対して2方向からのアプローチによって俯瞰的に解明を試みる。

<研究1: 後方視的アプローチ> では連携実践の熟達者を対象とした面接調査によって学

びの過程を捉える。すでに連携実践力を備える熟達者を対象に、連携実践力獲得までの経緯や事例の回顧的報告を聴取し、領域を超えて共通する学びの過程とそこに影響する関連要因（環境・方略等）を明らかにする。

<研究2：前方視的アプローチ> では、連携実践力を身に着けたい連携初心者や専門職養成段階の人が、多職種連携実践のための協働的学習の中で新たな学びを得る過程や課題を追跡しながら分析する方法を用いる。

4. 研究成果

後方視的 / 前方視的な2つのアプローチによるそれぞれの研究で得られた成果を以下にまとめる。

<研究1：後方視的アプローチ>

成果1) 発達支援専門職における多職種連携コンピテンシーの抽出

発達支援に携わる専門職の多職種連携コンピテンシーを明らかにすることを目的とした。取得資格、経験年数、所属機関、職位などの要因を超えた、職域横断的かつ普遍性のある共通点を見出すため、発達支援専門職6名に面接調査を行った。インフォームドコンセント(; IC)ののち倫理的配慮を十分に行って実施した。

PAC分析(Personal Attitude Construct ; 個人別態度構造分析 ; 土田, 2017)を用いて『IPWの実践において、発達支援専門職が持っておくべき重要なコンピテンシーは何だと思いますか』という質問への計60センテンスの連想反応を対象に、テキストマイニングにより分析した(Figure1)。

その結果、職種を超えた連携実践コンピテンシーとして4つのまとまりが抽出された。他者との交流や自己研鑽を通して、

地域や職場の中で専門性を生かす意思を持つこと、多様な考えを受け入れる聞く力と発達の知識があること、相手との連携できる関係作りのための自発的な具体的行動化、会議を組み立て、連絡報告などの機能を持つ調整能力やその役割、が抽出された。

成果2) 多職種連携の実践や学びの促進要因の解明

多職種連携実践や連携に関する学びの促進要因や、学びの環境、経験等を明らかにすることを目的とした。発達支援の専門性の異なる専門職4名にPAC分析の手続きを用いて面接調査を行った。ICののち調査参加への同意を得て、研究倫理に十分配慮して調査を実施した。PAC分析の中で「IPWを実践するうえで個人的に大切にしていることは何か」という刺激文に対する連想反応の統計的な処理と、さらに各人の多職種連携の実践と学び、特に経験と学習促進要因に対する意味づけを経て、最終的には統合的なデンドログラムの形式で

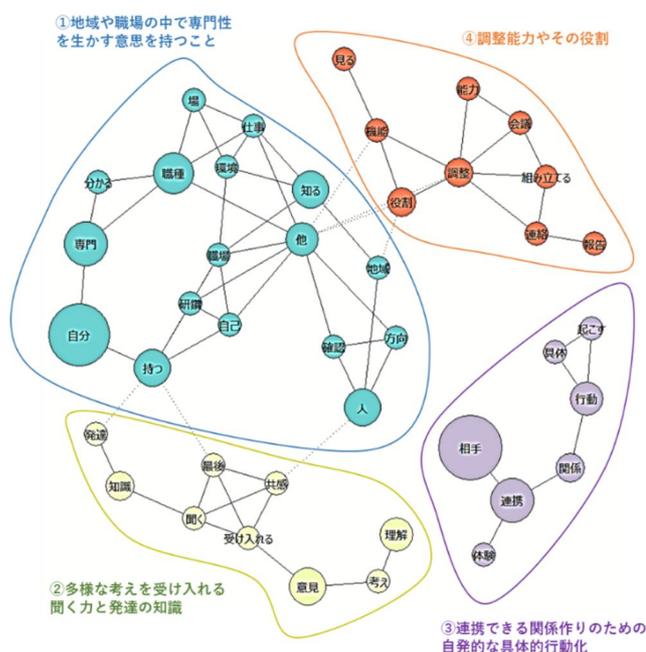


Fig.1 発達支援専門職の多職種連携コンピテンシーに関する共通語彙の抽出と出現パターン(KH Coderによる出現語彙の共起ネットワーク)

認識構造を描出した。

連携実践や連携に関する学びの促進要因として、多職種連携に関して体系的に学ぶ機会、近接領域多職種が集うコミュニティなどのソーシャルキャピタルの醸成、連携の個人的なスタイルの確立が不可欠であることが示唆された。これら 3 点の要素が、臨床現場での実質的な IPW をささえるとともに、個人の連携に対する学びを促進させる要因ではないかと考察された。

<研究 2：前方視的アプローチ>

研究 1 から、多職種とともに卒前・卒後ともに IPE の場と機会の提供、さらに IPE の内容と運営の課題について検討する必要があると考えられた。そこで、いくつかの調査および実践的研究から得られた成果を以下に示す。

成果 3) 卒前教育段階における多職種連携に関する学習項目の位置づけ

発達支援関連の国家資格取得を目指す大学等の専門職養成課程に向けて作成・公表されている、各専門職のモデル・コア・カリキュラムを概観し、卒前教育段階における多職種連携に関する現状、特に学習項目の位置づけについて分析した。発達支援に関係の深い専門職として、教育領域から教職課程、リハビリ領域から作業療法士 (OT)、理学療法士 (PT)、言語聴覚士 (ST)、医療領域から看護師 (Nrs)、福祉領域から社会福祉士 (SW)、心理領域から公認心理師 (LP) の 6 つの国家資格を対象として、最新版のモデル・コア・カリキュラムを収集し、内容を分析した。“多職種連携”ないし“チーム”の用語の出現頻度、多職種連携が学修目標に含まれる上位項目を比較した。

その結果、教職以外の 6 つの職種では、多職種との連携協働に関する項目は少ないながらも比較的明確に位置づけられていた。教職コアカリキュラムには「チーム学校」の文脈はあるが、“多職種連携”の用語は全くなかった。ただし実質的なカリキュラム運用は各機関に依るところが大きいとため先進している医療・リハビリ領域以外の領域については別途実態調査が必要ではある。特に、障害のある子どもの発達支援には学校教員の関与が中心であるにも関わらず、教職課程での IPE は実践研究報告も数えるほどであり、大きな課題であると考えられる (鈴木・森脇、2020)。

成果 4) 卒前教育段階 (教育領域) での IPE 実践とその効果

特別支援教育を専門に学ぶ教職課程 (学部生) に対して IPE プログラムを試行的に実施し、多職種連携に対するレディネスという側面から効果を検証した。A 教育大学の特別支援教育専攻科学生 24 名を対象とした授業内で、特に障害や発達支援に関する体系的学習を基盤として、学校に参与する多職種の役割・機能の接点や協働を丁寧に理解する IPE プログラムを企画し、90 分×5 回分 (計 7.5 時間分) で実施した。招聘した現職者は 4 職種 (心理士、OT、ST、児童精神科内の院内学級担当教員) 6 名で構成し、各回 2 名ずつ来校した。IC ののち研究協力に同意した 20 名分を分析対象とした。IPE の効果検証には「専門職連携のためのレディネス尺度 RIPLS ; Readiness for Inteprofessional Learning Scale」を使用した。その結果 (Table1)、IPE の pre-post において 2 項目に差が認められた (Item10 「他の専門職と一緒に学ぶことで、私の時間を無駄にしたくない」は post 低減; $Z = -1.89$ 、 $p < 0.10$, $r = -0.42$ 、item14 「私は、他の専門職を含む支援チームでの仕事の機会を楽しみにしている」は post 上昇; $Z = -1.94$, $p < 0.10$, $r = -0.43$)。参加者らには自職の専門性に気づき理解するための時間コストに対する費用対効果に対する意識の変化と、多職種との協働に

対する期待が持てる点でレディネスの向上が認められた。

Table1 教育用改訂版 RIPLS による pre-post 比較結果

item	pre		post		Z	効果量 r
	mean	SD	mean	SD		
1 他の専門職と一緒に学ぶことは、私自身が、子どもの支援チームに貢献できるメンバーになるために、役立つだろう	4.46	0.51	4.40	0.50	0.71	
2 もし子どもの問題を解決するために支援チームと一緒に働くことができたならば、それは子どもにとって最善の利益となるだろう	4.29	0.69	4.20	0.70	-1.07	
3 他の専門職と一緒に学ぶことは、自分自身の臨床的問題の理解力も向上させるだろう	4.21	0.59	4.25	0.64	-0.63	
4 資格免許取得前に他の専門職と一緒に学ぶことは、資格免許取得後の関係性も向上させるだろう	4.08	0.72	4.15	0.81	-1.19	
5 コミュニケーションスキルは、他の専門職と一緒に学ぶべきだと思う	3.67	0.82	3.50	0.95	-0.91	
6 他の専門職と一緒に学ぶことは、他の職種についてポジティブに考えるためにも自分にとって役に立つだろう	4.00	0.72	3.95	0.76	0.00	
7 多職種と連携して働いたり学ぶためには、お互いに信頼し尊敬しあう必要があるだろう	4.63	0.58	4.60	0.60	0.00	
8 チームワークのスキルは、あらゆる職種の学びにおいて本質だと思う	4.04	0.86	4.05	1.00	0.00	
9 他の専門職と一緒に学ぶことは、私が、私自身の限界を理解することに役立つだろう	3.38	0.92	3.40	1.05	-0.50	
10 他の専門職と一緒に学ぶことで、私の時間を無駄にしない	2.29	0.69	2.10	0.79	-1.89	† 中 (-0.42)
11 専門職見習いの学生としては、他の職種と一緒に学ぶことは必要ないと思う	1.83	0.56	2.00	0.79	-0.88	
12 臨床的な問題解決スキルは、自身の領域（専門部門）からのみ学ぶことができるだろう	1.71	0.62	1.85	0.81	-0.71	
13 他の専門職と一緒に学ぶことは、子どもや他の専門職とよりコミュニケーションするために、私にとって役に立つだろう	4.08	0.58	4.15	0.67	0.00	
14 私は、他の専門職を含む支援チームでの仕事の機会を楽しみにしている	3.67	0.87	3.95	0.69	-1.94	† 中 (-0.43)
15 他の専門職と一緒に学ぶことは、子どもの問題を自然なかたちで解決することに役に立つだろう	3.92	0.72	3.90	0.72	-0.56	
16 資格免許取得前に、他の専門職と一緒に学ぶことは、私自身をよりよい支援チームの一員にさせてくれるだろう	3.96	0.62	3.80	0.83	-1.31	
17 教育専門職やリハビリ専門職の機能は、主に医師のサポートを提供することである	2.71	1.00	2.70	0.80	-0.28	
18 支援チームにおいて、私自身の専門的役割は何かということについて確信がない	3.00	0.78	3.15	1.04	0.76	
19 私は、他の専門職よりもっと多くの知識とスキルを獲得しなければならない	3.58	0.72	3.80	0.83	-0.83	

† $p < .10$ 有意傾向

成果5) 現職者段階の IPE 実践と、IPE プログラムコンテンツの有用性

現職者向けの IPE 実践として、発達支援に関わる専門職のための「多職種連携ワークショップ」を研究期間内に3回開催した。ケース検討を中心に、職種専門性の同質性と異質性を学ぶ機会を設け、各専門職、各個人がコンピテンシーを発揮できるプログラムを想定した。コロナ禍によるワークショップ形式の変更や運営上の課題もあり、IPE プログラムとしての効果を判断するには時期尚早ではあるが、参加者からは一定の満足を得た。また、臨床場面での IPW にも適用できる『アリーナアセスメント』の応用や『エコロジカルマップ』といった IPE プログラム内のコンテンツに、連携実践力向上に向けた有用性が示された。

5. 引用文献

古株ひろみ・泊 祐子・竹村淳子・道重文子・谷口恵美子 (2012) 医療的ケアを担う特別支援学校に勤務する看護師の他職種および保護者との連携と仕事満足との関連, 人間看護学研究 (研究ノート), 10, 59-65.

JAIPE; 日本保健医療福祉連携教育学会 (2016): 医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー. 第1版, https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryoo/pdf/Interprofessional_Competency_in_Japan_ver15.pdf (2023/5/10 閲覧)

鈴木悠介・森脇愛子 (2020) 特別支援学校における外部専門家との連携の課題, 日本応用心理学研究大会発表代替論文集 抄録, 11.

土田義郎 (2017) PAC-Assist2: PAC 分析支援ツール, <http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (2023/05/10 閲覧)

World Health Organization (2010) Framework for action on interprofessional education and collaborative practice. (三重大学による日本語訳版: 2014)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森脇愛子	4. 巻 69(2)
2. 論文標題 特別支援学校教員養成課程における多職種連携教育IPEの実践：参加学生の多職種連携に向けた学びの準備性・実践志向性の変化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 519-527
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇愛子・林安紀子	4. 巻 36
2. 論文標題 学校教員および教育支援職の採用選考・資格認定における合理的配慮提供の現状～教員等養成大学における障害学生支援の在り方を検討するために～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 157-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松本英季・森脇愛子
2. 発表標題 企業における障害者雇用に対する不安解消に向けた手立の探索的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森脇愛子
2. 発表標題 多職種連携教育IPEにおけるアリーナアセスメント実践 - 発達支援領域における効果的なIPE運用方法を探る
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前川圭一郎・荻野昌秀・安原康朗・森脇愛子
2. 発表標題 多職種 / 他業種連携による校（園）内支援体制整備の実際
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森脇愛子
2. 発表標題 特別支援教育に関わる専門職における多職種連携教育 - 教職課程および専門職養成のモデル・コア・カリキュラムを概観する
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森脇愛子・飛田孝行・佐藤舞・田中里実
2. 発表標題 発達支援における多職種連携協働の可能性（6）連携が“止まる”とき、何を考えるか
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会第18回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森脇愛子・飛田孝行・佐治信一郎・宮野雄太
2. 発表標題 多職種連携を学ぶ～「互いに、互いについて、互いから学ぶ」ことへの挑戦～
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森脇愛子・佐藤舞・生駒花音・日戸由刈
2. 発表標題 発達支援における多職種連携協働の可能性(5)「もったいない連携」の背景とその解決策
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会第17回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森脇愛子・兼田浩・生駒花音・飛田孝行・夏目知奈・前川圭一郎
2. 発表標題 教員と多職種外部専門員チームにおける情報共有ツールの効果検証～知的障害特別支援学校での実践から～
3. 学会等名 日本LD学会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森脇愛子・佐藤舞・武藤加菜・生駒花音・横田千賀子・富田享子
2. 発表標題 臨床発達心理学系研究室での経験はライフコース、キャリアパスにおいてどう活かされるか?～教育・医療・福祉、家庭生活・子育て・介護、それぞれの道で振り返る～
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森脇愛子・飛田孝行
2. 発表標題 発達支援領域における多職種連携教育IPEモデルの創出 アリーナアセスメントを応用したIPEの予備的研究
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木悠介・森脇愛子
2. 発表標題 特別支援学校における外部専門家との連携の課題
3. 学会等名 日本応用心理学会；大会発表代替論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飛田孝行・生駒花音・森脇愛子
2. 発表標題 発達支援における多職種連携協働の可能性（４）－連携の質を決める「真の情報」とは何か
3. 学会等名 臨床発達心理士第15回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森脇愛子
2. 発表標題 発達支援専門職の多職種連携協働IPWを支えるコンピテンシーの分析
3. 学会等名 日本LD学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兼田 浩・森脇愛子・生駒花音・伴 光明
2. 発表標題 知的特別支援学校と外部専門家の連携協働から見たもの－サステイナブルな多職種連携を目指して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森脇愛子・横田千賀子・飯田悠佳子・永作 稔
2. 発表標題 発達支援領域における多職種連携協働と大学の役割ー地域リソースとしての大学、地域リソースを生み出す大学
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木悠介・森脇愛子・前川圭一郎・成川敦子
2. 発表標題 効果的・継続的な多職種連携の在り方を探る
3. 学会等名 日本学校心理学会第20回大会・第40回国際学校心理学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森脇愛子・生駒花音・仲野真史・前川圭一郎
2. 発表標題 発達支援における多職種連携協働の可能性（3）連携の維持にかかわる意義・要因・課題の検討
3. 学会等名 日本臨床発達心理第14回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森脇愛子
2. 発表標題 高等教育機関における障害学生支援の課題：身体障害と発達障害・精神障害との重複の状況から
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会第59回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森脇愛子・前川圭一郎・佐藤舞
2. 発表標題 発達支援専門職の多職種連携協働を支えるものは何か PAC分析を用いた連携コンピテンシーの構造分析
3. 学会等名 日本LD学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木悠介・森脇愛子・前川圭一郎・成川敦子
2. 発表標題 多職種連携が学校で根付くには？ 子どもの発達を支える専門家の立場から
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森脇愛子・飛田孝行・佐藤舞・伊藤匡
2. 発表標題 発達支援における多職種連携協働の可能性（2）事例を語り、事例を通して語り合う場に見る多職種連携
3. 学会等名 日本臨床発達心理士第13回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森脇愛子・奥住秀之・藤野 博
2. 発表標題 発達障害学生支援における地域医療機関との連携：修学支援体制と大学保健管理体制の協働に期待されること
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森脇愛子・飛田孝行・夏目知奈・生駒花音・佐藤舞・前川圭一郎
2. 発表標題 特別支援教育教員養成課程における多職種連携教育IPEの実践(2) IPE参加を通じた多職種連携の学び・実践に対する意識の変化
3. 学会等名 日本LD学会第26回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森脇愛子・林安紀子
2. 発表標題 教育専門職養成大学における障害学生支援の在り方について
3. 学会等名 平成29年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森脇愛子・藤野 博
2. 発表標題 発達障害学生支援の課題～大学保健に関わる医師から大学教職員へ伝えたいこと
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森脇愛子・前川圭一郎・夏目知奈・岩倉昌子
2. 発表標題 発達支援現場の文脈で、多職種連携協働コンピテンスを磨く
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森脇愛子
2. 発表標題 子どもを対象とする教育 - 医療専門職のための多職種連携教育の実践
3. 学会等名 ファイザー第24回ヘルスリサーチフォーラム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤野博、森脇愛子、袖山慶晴	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 94
3. 書名 自閉スペクトラム パディ・システムスタートブック：仲間づくりとコミュニケーションの支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------